

薬史レター

(薬史学会通信改題)

日本薬史学会

J S H P



第42号

2006年3月

〒113-0032 東京都文京区弥生 2-4-16 (財)学会誌刊行センター内日本薬史学会事務局
TEL (03)3817-5821 FAX (03)3817-5830 URL <http://yakushi.umin.jp/>

2006(平成18)年度日本薬史学会総会・講演会

日 時：平成18年4月15日(土)

場 所：東京大学大学院薬学研究科総合研究棟講堂

総 会(13時30分～14時20分)

報 告(14時30分～14時50分)

- ・薬学における薬史学教育に関する2005年アンケート調査

三澤 美和、五位野 政彦、塩原 仁子、津谷 喜一郎、宮本 法子、山川 浩司

講演テーマ：薬学教育六年制と薬学生の病院・薬局実務実習(15時～17時)

- ・大学病院薬剤部の薬学生の病院実務実習の取り組みと日本病院薬剤師会

矢後 和夫(北里大学教授・病院薬剤部長)

- ・薬学教育協議会の薬学生の病院・薬局実務実習調整機構の役割

百瀬 和亨(薬学教育協議会)

懇親会(東京大学・山上会館；17時30分～)

連絡先：東京都文京区弥生2-4-16

(財)学会誌刊行センター内、薬史学会事務局(電話・03-3817-5821)

日本薬学会第126年会(仙台)

日 時：2006(平成18)年3月29日(9時15分～12時15分)

場 所：R会場 せんだいメディアテーク オープンスクエア

薬史学 ポスター発表

- ・医薬品添付文書の比較考察—1950年代と2000年代(その5)

五位野 政彦(東京海道病院薬)

- ・星薬科大学校歌・寮歌考

三澤 美和(星薬大)

- ・日向薬事始め(その3)—延岡の医祖、渡辺正庵とその周辺—

山本 郁男、宇佐見 則行、井本真澄(九州保福大薬)

- ・宮内庁より移管された生薬標本について(4) 標本目録とこれまで照合できなかった標本について
江崎 勝司、佐竹 元吉、合田 幸広(国立衛研、お茶水大)
- ・「医心方」の原典(1)
塩原 仁子(昭和大薬)
- ・牛病身所(第二巻及び第三巻)に使用された薬物に関する考察
白井 一城、菰田 綾佳、西野 正雄、林 俊祐、宮本 如奈、高倉 弘士、
乾 真由美、畠山 有理(北陸大薬、大阪府立藤井寺高校、同 富田林高校、
同 生野高校、同志社大文、立命館大産業社会、大阪薬大、長崎大薬)
- ・医薬品産業の発達と知的財産権保護
耕田 祥子、玉井 克哉(東大院工、同先端研セ)

日本薬史学会 2006(平成 18)年会(名古屋)予告(2) 研究発表演題の募集

日 時：平成18年11月11日(土)9:00～

年会長：奥田 潤(名城大学薬学部)

会 場：名城大学薬学部6号館情報メディア教室(名古屋市天白区八事山150)
(名城大学八事校舎：地下鉄八事駅東へ徒歩5分)

主 催：日本薬史学会、名城大学薬学部、エーザイ(株)内藤記念くすり博物館

研究発表：口頭発表(1演題20分：発表・質疑応答)

午前中は同会場で病院薬剤師シンポジウムが開催されます。

申込方法：E-mail、郵便又はFAXで下記項目を記入し年会事務局へお送り下さい。

郵便の場合下記 (1)発表申込用紙と(2)官製はがきを同封し下記申込先へ郵送下さい。

(1)「日本薬史学会年会研究発表申込」とプリント印字したA4用紙に、プリント印字で、
下記の 1. 2. 3. の順で記入してください。

1. 研究発表演題
2. 研究者全員の氏名(発表者に○)と所属
3. 連絡先・住所・氏名・電話・FAX・E-mail

(2) 官製はがき・申込受理用(返信先住所記載のこと)

講演要旨記述用の所定の用紙などをお送りします。

E-mailの場合、添付文書にせず、直接メールに必要事項を記入し送信ください。

なお、発表者は発表申込時点で日本薬史学会会員に限ります。

発表演題申込の締切：平成18年7月7日(金)(必着)

講演要旨提出の締切：平成18年9月15日(金)(必着)

年会参加申込：年会参加申込等については、次回ご案内します。

年会事務局：

連絡先 名城大学薬学部薬学教育開発センター 飯田耕太郎
〒468-8503名古屋市天白区八事山150
電話：052-832-1781(内線385) FAX：052-834-8090
E-mail:iida@ccmfs.meijo-u.ac.jp

[学会報告]

日本医史学会・日本薬史学会・日本獣医史学会・日本歯科医史学会 合同12月例会

恒例の上記四学会の合同例会が平成17年12月17日に順天堂大学医学部に於いて開催された。午後2時、今回当番の黒川獣医史学会会長の開会挨拶に始まり、下記4題の講演が発表された。出席者は120名。

- 1) 星薬科大学創立者 星 一の生涯 三澤 美和(薬史学会)
- 2) 日本に伝わった中国解剖図 酒井 シヅ(医史学会)
- 3) 医学史、歯科医学における横浜 榊原 悠紀田郎(歯科医史学会)
- 4) 日本における法医学の歴史 池本 卯典(獣医史学会)

終了後、午後5時より有山記念館地下食堂で懇親会が開催された。

日本医史学会 1月例会

平成18年1月28日(土)午後2時より順天堂大学医学部に於いて開催された。

シンポジウム「個人情報保護と医学史研究」

- 1) はじめに 岡田 靖雄
- 2) 個人情報保護法と個人史研究 森田 明(弁護士)
- 3) 個人情報保護と学会誌編集 瀧澤 利行

2000年4月より個人情報保護法が全面施行されたことに関連して問題点、注意事項などが発表された。この問題は本学会でも等閑に出来なくなるであろう。

北海道支部だより

北海道支部からの近況を報告します。

○平成17年会実行委員会：「支部総会」開催の準備(平成17年10月31日、薬事会館)

年会の収支決算報告の監査を受け、年会の終了が確認されました。本来ならば、この時点で報告会(および慰労会)が筋ですが、支部総会に切り替えました。今年度前半の半年間、支部は諸行事を棚上げして年会の実施に全力投球してきたからです。そのため今年度の支部総会を開催し、そこで年会終了の報告を行うことに決定、早速、総会の準備に取り掛かりました。

○平成17年度北海道支部総会：総会および懇親会(同年11月26日、第一ホテル)

年会終了の報告、16年度支部活動・会計報告など。次いで17年度事業計画と予算案、支部会則の一部改定(役員の異動)などを審議。事業として、年明けの2月に例会(と講演会)を開催することに。総会後の懇親会は、遠路からの出席者も交え燃え上がりました。

○第1回幹事会：支部例会の準備(同年12月22日、北海道医療大学サテライトキャンパス)

例会は平成18年2月24日開催と決定。演者：斎藤支部長と西澤信教授(東京農大・網走)。支部長より北海道医史学研究会(会長：飯塚弘志北海道医師会会長)から学術交流(勉強会)等の勧誘があった旨報告あり。扱いは、お受けする方向で次の幹事会に諮る事。

○第2回幹事会：例会の準備、学術交流、北海道薬学大会の件ほか(平成18年2月20日、(株)まるいち)

例会の議題説明、講演会の準備(座長、会場など)の確認、第53回北海道薬学大会(同年5月13・14日)への演題募集および特別講演、医史学研究会との学術交流はお受けする、等を決定。なお、例会での講演会の概要は以下の通り。

日本薬史学会北海道支部平成17年度例会(講演会)

日 時：平成18年2月24日(金)18:30～

会 場：北海道薬事会館3階研修室

主 催：日本薬史学会北海道支部

後 援：社団法人 北海道薬剤師会

参加費：無料(参加自由)

講演1 日本の薬学の開祖 長井長義先生の書について(20分)

演者：斎藤 元護先生(日本薬史学会理事 北海道支部長)

要旨：大正7年、長井先生(1945～1925年)ご来道の機会に、私の祖父斎藤弘輔(初代道薬会長)のために揮毫して頂いた書とそれに関連した薬学薬業の歴史

講演2 昆布をめぐる薬史(60分)

演者：西澤 信先生(東京農大(網走)生物産業学部・食品科学科 教授)

要旨：北海道特産の昆布は日本の伝統的な食品であり、日本独特の海草食の重要な素材だが、医薬品としての長い歴史もある。昆布に関する歴史を概説する。

* 出席者には日本薬剤師研修センター認定の受講シール(1単位)が配布されます。

* 講演終了後、お二人の先生を囲んで懇親会を予定しております。皆様の御出席をお待ちしております。

平成18年2月20日 日本薬史学会 北海道支部 事務局 吉沢 逸雄

東北の医薬史蹟を訪ねてみませんか

仙台市

薬学会第126年会が3月28から30日まで杜の都、仙台市で開催されます。この機会に東北の医薬史蹟を訪ねてみませんか。先ず会場になる仙台市からはじめましょう。仙台市は今は近郊の秋保や作並温泉まで含まれる広域な政令指定都市になりましたが、仙台市街は歩いてでも回ることが出来ますから、足に自信のある方には歩いて見て回ることをお勧めします。随所に史蹟にめぐり合えます。しかしレトロな市内循環バス「るーぶる仙台」が市内を運行していますから、このフリーパスを利用すると便利でしょう。

バスで先ず広瀬川の畔の経ヶ峯歴史公園に、仙台藩主の伊達政宗の御霊屋の絢爛豪華な桃山様式の「瑞鳳殿」を訪ねましょう。次にこのバスで仙台城址にある正宗の像を見て、城址から仙台市外の眺めは杜の都を満喫できます。バスは青葉山の理学部自然史標本館、宮城県美術館を循環しています。定禅寺通市役所前で降りると近くに勾当台公園があります。この公園には仙台の繁華街の東二番町通りを歩いて行くことが出来ます。この勾当台公園には赤痢菌の発見者として知られる志賀潔(1870～1957)の胸像と顕彰碑があります。志賀潔は1870(明治3)年に仙台藩士の佐藤信の五男として生まれ、8歳で母方の志賀家の養子となりました。志賀は藩医を務めていたことから潔は東京大学医学部に進み、卒業すると北里柴三郎の伝染病研究所に入所しました。ここで1898年に北里の指導を受けて赤痢菌を発見する輝かしい業績を上げました。その後、ドイツのエールリッヒの元に留学して化学

療法剤の研究をしてトリパン赤とよぶ色素療法剤を開発しました。帰国後、伝染病研究所でワクチンや化学療法剤の研究で業績を上げました。この勾当台公園内に志賀潔の胸像と顕彰碑が建てられています。

伊達政宗により拓かれた仙台藩は青葉山に仙台城を築城し、大問屋に免許を与えて城下町を拓きました。城下町では薬種問屋の小谷家を中心として薬種と売薬を扱い、藩校の養賢堂に医学館を開き、ここに施薬所を設けて薬園を拓きました。市内の名勝、国宝・大崎八幡宮は1607年に伊達政宗により創建された桃山風の権現造りの社殿です。この社殿の石の間の格天井に53種の薬草図が描かれています。平成十一年から解体大修理が行われて平成十六年の秋に創建当時の華麗な桃山風社殿に復元されました。現存する桃山風の建築の唯一のものになっています。

所在地：御薬園跡：仙台市宮城野区元寺小路1-5；大崎八幡宮：仙台市青葉区八幡

仙台から足を伸ばした医薬史蹟の案内

一関市・一関市博物館、大槻玄沢

東北新幹線一関駅を出ると駅前に大槻三賢人の像が迎えてくれます。一関は蘭学者大槻玄沢が生まれた地で、玄沢の孫の国語学者の大槻文彦が「言海」を編纂した事でも知られています。一関市は平成9年10月に2階建ての立派な一関市博物館を一関駅から20分の名勝地巖美溪の地に建設しました。2階に4つのテーマの展示、舞草刀剣、玄沢と蘭学、文彦と言海、一関と和算を展示しています。ここには玄沢の蘭書階梯の版木、蘭方医療道具などが展示され、年数回の企画展が開催されています。一関市は岩手県南部にあり仙台藩領でありました。最近は一関流通団地、一関工業団地が造成され電子、精密機械産業などが発展しています。所在地：一関市巖美町沖野々215；交通：東北新幹線一関駅からバス20分巖美溪で下車

大槻玄沢(おおつき・げんたく；1757～1827)は江戸後期の蘭学者で、一関の藩医の玄梁の子として生まれました。藩医の建部清庵について医学を学び、次いで江戸に出て杉田玄白、前野良沢に蘭学を学び、オランダ語の入門書「蘭学階梯」を出し幕府の蛮書和解御用掛となりました。厚生新編、重訂解体新書などを出版した蘭学の第一人者でありました。この医学書で、血液、脂肪、消化、分泌などの言葉が生まれました。江戸京橋に蘭学塾の芝蘭堂を開き多くの蘭学者を育てました。玄沢は芝蘭堂にあって実学より次第に西洋文化を追求する洋学者に転進しました。

水沢市・高野長英記念館・後藤新平記念館

水沢市は平安朝の初期に坂上田村麻呂によって胆澤城が築かれた歴史の町です。水沢の三偉人・高野長英、後藤新平、斉藤実のそれぞれの記念館があります。

高野長英(たかの・ちょうえい；1804～50)は江戸後期の蘭学者、思想家。江戸に遊学して杉田玄白の門人となり、長崎でシーボルトの鳴滝塾で西洋医学と西洋事情について学びました。日本最初の生理学書「医原枢要」を出し、国際事情を考察して「夢物語」を出しましたが、これが幕府から危険人物と見られ蛮社の獄の弾圧で入獄。その後、脱獄して国内を逃亡しましたがやがて見出されて47歳で自刃しました。

水沢市の高野家の所有地の水沢公園内に、庭木に囲まれた高野長英記念館が落ち着いたただ住まいを見せ、記念館にはこれらの書籍、書簡類、処方箋などが展示されています。

市内にイラストマップが掲示されていて迷うことはありません。

所在地：水沢市中上野町1-9；交通：JR東北線水沢駅から徒歩10分〔文献：佐藤昌介著、高野長英、岩波新書(1997)〕

後藤新平（ごとう・しんぺい；1857～1929）は明治6(1973)年に福島県立須賀川病院の医学所に学び、恩師の阿川の勧めで愛知県病院に移り司馬凌海、オーストリアの医師のローレツの指導を受けました。衛生警察学、裁判医学、断訟医学(裁判医学、法医学)などを翻訳しました。後に愛知県病院長兼愛知医学校長となり公衆衛生の建白書を当時の内務省衛生局長の長与専齋に提出して認められました。内務省に入り後に衛生局長になり衛生行政、健康保険制度などで功績をあげました。局長時代に漢方医の復活を葬り漢洋医学闘争にけりをつけて衛生行政に生涯をささげました。市役所の近くの後藤新平記念館には多くの明治、大正の政治資料と衛生行政関係の資料が展示されています。また近くに後藤新平の旧宅が保存されています。

所在地：水沢市大手町4-1；交通・JR東北線水沢駅より徒歩10分

山形市郷土館(旧済生館本館)

仙台から仙山線に乗ると約1時間で山形市に着きます。ここには次の旧済生館本館があります。
明治新政府は西洋医学を導入して医療と教育を行いました。初代山形県令三島通庸は山形県公立病院の済生館を建て、医学寮のお雇い外国人にオーストリー・ハンガリー公使館付医官ローレツ(Albrecht von Roretz)を採用して医学教育に当たらせました。ローレツはウィーン大学で内科、外科を専攻した医師です。来日してから金澤医学校を経てこの医学校に赴任して勤務しました。この済生館本館は現在、霞城公園内に移築されて国の重要文化財として市郷土館になっています。本館は洋風三層楼で1階は14角形、2階は16角形、3階は8角形の特異な建築です。1、2階には済生館資料と郷土資料が展示されています。ローレツの著した薬剤学の著書もあります。中庭にはローレツのレリーフが建てられています。所在地：山形市霞城町1-8；交通・JR山形駅より徒歩15分、霞城公園内。

その他の東北の医薬史蹟

東北新幹線で盛岡市に出て盛岡城址公園に向かうと盛岡市中央公民館があります。ここは南部藩の西洋医学所の日新館と薬園があったところです。日新館は南部藩の理化学センターでした。盛岡市愛宕町、中央公園。青森県の弘前市は弘前藩の城下町として拓けた町で弘前城近くに藩校の蘭学堂を拓き蘭学、医学を教える薬園を拓きました。弘前市は多数の近代化遺産の建造物が多く見るべきものがあります。江戸時代に東北の薬草を幕府の採薬使の丹羽正伯とともに歩いた旅行家、菅江真澄の資料室が秋田市の秋田県立博物館の菅江真澄資料センターで見ることが出来ます。また秋田県の名勝、田沢湖に近い角館に解体新書の表紙絵と腑図を描いた小野田直武の碑と平福記念美術館に絵画があります。

東北新幹線で仙台の手前の郡山から磐越西線で猪苗代湖畔には野口英世記念館、さらに会津若松まで行けば会津藩の名城の会津若松城と御薬園などがあります。また少し不便ですが郡山から水郡線で磐城浅川駅下車するとがん研究で業績をあげた浅川町・吉田富三記念館があります。

この他の医薬史蹟については、山川浩司編著「全国医薬史蹟ガイド」薬事日報新書(2004)を見てください。

【書評】

ポンペ化学書—日本最初の化学講義録—

芝 哲夫 訳 化学同人(2005、6 刊)、B5判、202頁、定価5,000円

ポンペ(1829~1908)はオランダのユトレヒト軍医学校を卒業した軍医で、1857年に28才で長崎出島のオランダ商館長つき医師として来日した。これまでケンペル、ツェンペリー、シーボルトなどの優れた医師たちが出島で日本の蘭方医術を学ぶ医師に多くの影響を残した。ポンペは西洋医術を教えるだけでなく、西洋医学を教育するには各藩から集まった青年医師に基礎教育、基礎医学、臨床医学と臨床実習が必要であるとして、松本良順や司馬凌海らの協力を得て教育を始めたと伝えられている。在日中に医学教育には病院が欠かせないとして長崎に小島養生所という西洋病院を建設して、病人の治療と西洋医師の養成教育をはじめた。そのための基礎教育の一つに化学を教えたとされている。訳者の芝哲夫先生はタンパク質化学と科学史を専攻された方で、ポンペの化学講義録を探し求めポンペの化学の筆記講義録を苦勞して入手された。本書はこの日本語訳である。

評者は医学を学んだ医師としてのポンペの基礎学の講義は、広い知識を身につけさせるための教養教育で概論的なものと思っていた。しかし本書は幕末の当時としては本格的な化学の講義であった。ポンペの化学講義の底本になったものはドイツの科学者ワグネルの著書、Die Chemieのオランダ語訳である。当時の無機化学としては本格的なもので短い化学概論の後、非金属と非金属化合物を1:2の配分で記述されている。訳者の芝先生はポンペの化学講義録とワグネルの化学書の両者を比較しながら翻訳し、ポンペは所々に他の本からの知識で手を加えているとしている。ポンペがいかに関心の養成教育に情熱を注いでいたのかが理解される。本書はこのような意味から読まれるべき労作であろう。

しかし各藩から蘭方医術を学ぶために集まった基礎知識をあまり持たない青年医師たちには、この他の基礎学の講義も同様であったと想像されるから、ポンペの講義にかなり面喰らったと思う。ポンペによる医学講義は日本の医学教育として初めての本格的なものであった。ポンペの基礎学には薬物学、薬剤学も含まれていたから、この意味からも日本の西洋医学と薬学の最初の教育がポンペによって始められたということが出来よう。若い医師のポンペが一人で基礎から臨床医学を教育したことは幕末の時代を考えると大きな驚きでもある。

(山川 浩司)



長崎大学医学部内にあるポンペと小島養生所のレリーフ(山川浩司撮影)

五位野 政彦

マンガ、コミック、アニメは日本を発信元とした世界に誇るべき文化です。アジア各地はいうに及ばず、ドイツ、フランス、アメリカなどでも現地の言葉に翻訳されています。

では、その中に薬、あるいは薬学にかかわる作品がどれくらいあるのでしょうか。また現状はどうでしょうか。将来はどうなるのでしょうか。どうすべきでしょうか。このことを書いて見たいと思います。

古くは戦前の人気マンガ『のらくろ』(田河水泡)の中に、大道でニセ薬を販売するシーンがあった、そのように記憶しています。これは、軍を退役したのらくろが大陸に渡ったときのエピソードです。現地で体調を崩したのらくろが、大道で売っている薬商人に効き目などを尋ねていました。その際、大道商人は「のめばのむほど効きます」と答えています。その後さらに病状が悪化したのらくろが医師に受診すると、「そんなニセ薬をのむから体調がわるくなるのだ」というようなことを言われています。戦前の日本を代表するマンガの中で、医薬品の適正使用に関する啓蒙が行なわれていたこととなります。

下って、戦後、長谷川町子の作品の中にも薬局、薬屋が登場します。『サザエさん』には<医薬分業>のせいでトラブルがあった、とするシーンがあります。ただし、これは作者の誤解によるものです。ほかにも、ワカメが薬局へベンジンを買いに行く(その薬剤師は和服に白衣でした)話もあります。おまけの風船だけを持ち帰り、肝心のものは忘れてしまいました。マスオが薬剤師に相談する話もあります。クシャミをとめる薬を買いに来たマスオに「クシャミくらいでたっていいでしょう」と薬剤師が笑っています。マスオは「いま、ひどい下痢をしているので」と答えたことから、薬剤師が薬品棚を探しはじめます。ここでは止瀉剤を探していないことはおもしろいことです。また、『エプロンおばさん』には薬局の薬剤師が医薬品を取り違えて販売するシーンがあります。『似たもの一家』にはヒロポンが登場します。長谷川町子の世界では、薬局、薬剤師は普通の店舗、普通の人々として描かれています。

医師の登場するマンガ、コミックの代表作は手塚治虫の『ブラックジャック』でしょう。この作品以降、医学を題材にしたマンガが数多く上梓されています。ただし、この『ブラックジャック』を含めて、作品中に薬剤師が登場することはまずありません。獣医学部を舞台にした『動物のお医者さん』(佐々木倫子)や、新人看護婦が主人公の『おたんこナース』(佐々木倫子)はありますが、薬剤師が主人公のコミックをすぐには思いつくことができません。

薬剤師が主人公であるコミックの数少ない例として『日経DI(ドラッグインフォメーション)』誌に、数年間4コママンガが掲載されていたことをあげることができます。真右衛門(しんえもん)作の『カッコいい薬剤師』『すてきなファルマシエンヌ』『カッコいい薬剤師りたーんず』がそれです。しかしこの3作品は、同名のコラムの挿絵という意味合いも持っているものでした。厳密に薬剤師が主人公であるコミック、マンガであるとはいいいくいとされます。

通常コミックは雑誌連載後単行本化されるのが通例です。たとえば看護師向けの雑誌には看護師を主人公としているコミックが多くあり(『ぼけナース』小林光恵など)そのほとんどが単行本になっています。また前記のほかにもナースを主人公としたコミックが単行本化されており、書店で見ること

ができます。しかしこの真右衛門氏の3作品は、単行本化の予定はないことが連載終了時の同誌編集後記に書かれています。したがって現在では読み直すことができません。

ほかに薬剤師が主人公のコミックとして、2004年に『まんがライフVol.457』誌に『まりあ薬局へようこそ』(田中見栄)が掲載されたことがあります。しかし単発の掲載でした。神奈川県病院薬剤師会発行の『マンガ病院薬剤師物語』もまた一般の書店では入手が困難です。現在は、薬剤師をメインにしたマンガ、コミックを読むことができない、というのが現状です。

薬学出身者が、推理小説の世界で活躍していることがあります。アガサ・クリスティーは薬局で働き、独学で薬学、毒物の知識を得ています。また横溝正史は大阪薬専の出身者です。

漫画家、コミック作家の中での薬学出身者の代表は武内直子でしょう。『美少女戦士セーラームーン』の作者である彼女は共立薬科大学の出身です。ただし、彼女の作品中でも薬学に関する場面があるのは、『コードネームはセーラーV』だけではないでしょうか。この作品の中には「ヴィーナス製薬のMR」が登場します。主人公が病院の中にいる敵を見破るために「MR」に魔法(あるいは特殊な能力)で変身したというものです。

マンガ、コミック、すこし範囲を広げてライトノベルも含めます。これらの媒体の中で、「薬」あるいは「薬を扱う」のは魔法使いや魔術師であり、そこで使用されるのは「魔法薬」である、というシーンを見かけることがあります。前記の『コードネームはセーラーV』でも魔法(特殊能力)が関わっています。

多くのマンガ、コミック、ライトノベルでは、「くすり」とは魔法薬のことであり、薬剤師あるいは薬を扱う者は魔術師でなくてはならない、という設定が求められているようです。『赤ずきんチャチャ』(彩花みん)には魔法薬専門の女の子が登場します。彼女の名前は「やっこちゃん」つまり「薬壺ちゃん」です。彼女は典型的な中世の魔女という衣装を身に付けています。柏葉幸子原作の童話『ファンファンファーマシー』はテレビアニメになりました。この女性薬剤師も同じように魔女であるという設定です。

薬学を舞台にする、あるいは現実の薬剤師が活躍するということはまだコミックの中では多くは取り上げられていません。現実服用する薬剤、あるいは衛生化学、毒物学の分野は、魔法や超能力に置き換えられてしまっています。本当に存在する医薬品を利用する、衛生化学に関する最新の科学知識を用いているという作品はありません。

とりあげにくいかもしれませんが。医学を題材にしたコミックで、例えば大動脈瘤破裂、というシーンがあった場合、読者に医学の知識がなくても、「大きな動脈のコブが破裂した」、とそのまま理解できるでしょう。しかし、重要な場面でマレイン酸フルボキサミンとかシェーンバインシュテッゲル法、あるいはメンタ・アルペンシス・ワリエトウス・ピペラスケンスなどと書かれていたら、普通の読者はそこから先は読まないでしょう。

2005年現在、多くの十代や二十代の世代の人々が一般の書籍よりも主にマンガ、コミックを多く読みます。将来、この難解な学術用語を乗り越えてでも読まれるような物語が、メジャーな雑誌に、魅力的な作品として登場した時、そして十代の読者が感動して読んでくれた時には彼ら、彼女らの薬学への興味が大きく広がることとなります。

少年時代に『キャプテン翼』(高橋陽一)を読んだ世代が、その作品の登場人物そのままにサッカーのワールドカップ、欧州や南米で活躍しています。薬学を舞台にしたコミックの読者が薬学を志すときには、薬学を支える層がさらに厚くなっていることでしょう。

薬学教育と薬草園

日 時 平成18年2月17日午後
場 所 伝統医療研究会事務所
出席者 川瀬 清
滝戸 道夫
末廣 雅也(司会、記録)

司会 「薬史学会通信」を「薬史レター」と改題して発行するにあたり、現役の薬剤師として職場で活躍しておられる方、また退職された後、「くすりの歴史」に関心を寄せて楽しみとしておられる方にも役立てばと思って座談会を開催しました。

いよいよ本年4月から、6年制の薬学教育が始まります。「薬学教育と薬草園」という題で、薬草園のことに詳しい滝戸先生をお招きして事務局理事の川瀬先生とのお二人にお話しして頂こうと思います。最初に薬学教育の中の薬用植物学というものを歴史的に考えてみるということで川瀬先生からお願い致します。

川瀬 日本の薬学教育は御承知のようにドイツに端を発するものですが、古くからある学校の図書館に行くと、幸いなことに、ドイツで刊行された全部で13巻の総合薬学百科辞典(J. Möller編のReal-Enzyklopädie der Gesamten Pharmazie, Urban & Schwarzenberg, Berlin, Wien. (1904~12))が残っています。その中のPharmazieschulen(薬学校)の項目はかつて東京薬科大学でドイツ語の教鞭を執っていた都倉先生により和訳されて薬史学雑誌32(1)76-81(1997)に掲載されています。

それを読むと、薬剤師の教育は徒弟教育でしたが、1820年には、ギルド(薬業者同業組合)によって薬学校が造られました。1823年にハンブルグ薬剤師協会は国家の監督下にハンブルグの薬学校の授業規定を制定しました。その中に夏期には定期的な植物採集旅行を行うことが記されています。この規則は辞典編纂時の1908年にも変わりなく行われていると書いてあります。

1970年に私が前におりました東京薬科大学で九十年史を作るために、大学に残っていた古い資料を集めて調べました。その時は根本曾代子先生(故人)にお願いして文章の体裁を整えて頂いて出版しました。その中に薬科大学の前身であった東京薬学校の同窓会が1893(明治26)年に静岡県御殿場で15日間に亘る夏期植物研究会を開催するにあたっての詳細な規約、注意事項が記されています。在学生を含めた今日で言えば卒業後教育講座に当たるものです。昼間は富士の裾野で植物採集をした後、学校の植物関係の先生が講義し、持参した顕微鏡で調べたりする。また上野金太郎先生が和漢薬論などの特別講義なども行われたようです。更に面白いことには、単に植物の勉強をするというだけでなくdiscussionをして、将来の道を話し合うというようなことが記録されていました。丁度、ハンブルグ薬学校の植物採集旅行と同じことが行われていたようです。

御承知のように18世紀までは、薬は全部が草根木皮だったわけで、19世紀になって、有機化学の研究が進んできて、だんだんと薬の原料に合成化合物が用いられるようになりました。丁度その頃、長井長義先生たちが中心になって日本の薬学が形成されて、有機化学が薬学の研究の中心を占めるようになりました。20世紀の私たちの学生時代は、植物や生薬は何時の間にか隅に置かれた状態になって、最近ではついに薬科大学の講座名から生薬学が消えてしまうという傾向にあります。このような歴史的な流れの中で、薬用植物は大事だということで、薬科大学は薬用植物園を設けなければな

らないというきまりになってきています。導入が長くなりましたが、ここで滝戸先生にバトンタッチが出来るのではないかと思います。

滝戸 私知っている昭和20年頃からの薬学教育での薬草園ということで川瀬先生の話の継いでゆきますと、薬用植物の教育には戦前から既に作り上げられていた植物の採集会の伝統を生かして、各学校ともおそらく専門の先生の指導の下に同好会などの組織によって運営されていて、年に2回位は、1泊旅行の形式で行われていたように覚えています。もっとも、現在は資源保護のために採集は出来なくなり、観察会となっています。

生薬学あるいは植物化学の研究をする場合にも、まず研究者自身が原材料を集めることからスタートしなければなりません。更に遡れば、植物についての基本知識がないと、目的に合った物の採集が出来なくなりますからね。

薬科大学の設置基準には、必ず規定に定められた面積の薬草園を持たなければならないことになっています。ところが、最近では薬草園の設置基準で、面積についての規定はありません。ですから、校舎の周りに薬草を植えただけでも薬科大学設立の認可が受けられることになりかねません。この点について私は大いに危惧しております。

実際の教育では、生薬学や植物化学の講義や学生実習のために植物の観察がどうしても必要です。当時のことを思い出しますと、埼玉県春日部の国立衛生試験所薬用植物栽培試験場を見学に行ったことです。種々の薬草の栽培法、生薬への調製法および薬学生が必修である阿片法を理解するため、ケシから阿片をつくる作業を見学しました。どの薬科大学でも見学に行かれたことと思います。

ケシから阿片をつくる作業は現在では小平にある東京都の薬用植物園あるいは国立医薬品食品研究所筑波薬用植物栽培試験場(独立行政法人薬用植物資源研究センター筑波研究部と最近改称されました)でしか見学することは出来ません。

話題をかえて、現在の日本の薬草園についてお話しします。総ての大学薬学部、薬科大学には薬草園があります。全部ではありませんがその中には社団法人の日本植物園協会に加盟して第4部会(薬用植物園)に属して活躍している園が多くあります。第4部会にはこの他、地方自治体や製薬企業の薬用植物園が加盟しており薬草栽培を研究しております。

また、国立医薬品食品研究所附属の国内4ヶ所(名寄、筑波、和歌山、種子島)の薬用植物栽培試験場があります。何れも見本園を持ち、日本の土地に適した薬草の栽培を研究しておりましたが、最近の行政改革で、別組織の独立行政法人薬用植物資源研究センターとなりました。研究施設は整っていますが、人員は必ずしも充足していないようです。

薬学教育から外れるかも知れませんが、日本では薬草栽培は余り盛んではありません。現在日本で使う生薬の80~90%が中国やその他の外国から輸入されています。将来、ずっと輸入出来る保証はありません。日本で東洋医学が見直されて、大学の医学教育の中に組み込まれたこともあり、将来漢方製剤の需要が増えて来ることが考えられます。中国の経済発展に伴い、中国自体での生薬の国内利用が増加することも考慮すべきでしょう。日本が必要としている薬草の種類70%は日本で作ろうと思えば作れるのですが、十分な量を適正なコストで供給出来るかが問題です。現在、生産コストの面から、薬草の栽培農家が減少して、生薬の生産が低下しております。

大黃、地黃などは栽培研究に成功した例で品種登録されています。研究の成果として薬草でも農作物同様に農林水産省に品種登録されるものが出来ていることは喜ばしいことです。

国産の生薬を作ることは緊急の課題です。少なくとも種苗の確保をすることが不可欠であり、栽培技術の保全も重要なことです。

司会 先程の明治26年に東京薬学校が御殿場で約半月にわたる植物研究会をやったということは、その頃の東京薬学校には薬草園はなかったのですか？

川瀬 その時点ではなかったと思います。当時、東大の下山順一郎教授が校長を兼務しておられました。実は下山先生はずっと後ですが、明治40年にご自身で薬草園を作られました。場所は現在の北区十条にあった御自宅に隣接したかなり広い土地で、是好園と命名されました。薬草の栽培、特に外国のものは株分けしたり、種子から増やすということを考えておられたようです。現在はすっかり住宅街となり、下山先生の後裔に当たる方の家が何軒かあります。

司会 それに関連して私は東京薬専校長だった鍋島豊太先生(東大明治43年卒)が私の家の御近所だったので、東大在学中に下山先生の授業で見学に行ったという話を伺いました。もちろん、東大には植物園はあったのでしょうか。この話は根本先生の草薬太平記・下山順一郎傳(平成6年、広川書店)にも記されています。

植物園の歴史について先生方から伺いたいと思いますが。

川瀬 ヨーロッパでは昔から教会が施療をやっていましたね。そこで使う薬草を栽培するのが始まりではないかと思います。スイスの山の中のザンクト・ガレンにそのような流れを汲む教会が残っています。現在は薬草を栽培していませんが、昔、何を何処に植えたかという図面も残っています。これは昔の有名なTchirch:Handbuch der Pharmakognosie(1933)にも示されています。図から9世紀の教会の薬草園がどのような薬草を栽培していたかを知ることができます。

大航海時代になると、ヨーロッパ人たちは、アジア、アフリカ、新大陸で新しい薬用植物を見つけると、先ず現地で栽培してからヨーロッパに持ち帰りました。

オランダがジャワ島で作ったのは現在のボゴール植物園、交通の要衝だったシンガポールの植物園はともに前者の代表的なもので、英国のキュー植物園、オランダのライデン大学の植物園は後者に分類されるでしょう。

日本では江戸時代の幕府および各藩のいわゆる御薬園ですね。

司会 植物園は研究、学校教育、社会教育、都市の環境保全、市民の憩いの園という役割を果たしています。薬草園となるとやや性格が限定されますね。有毒植物も栽培されていますが、一般の人は見学できるのでしょうか。

滝戸 順序としては、見学許可を申し出て、許可を得て見学することは可能です。また、公開講座を開いたり、博物館のように「友の会」制度があるところもあります。

司会 今日はお忙しいところを、いろいろとお教え頂き、有り難うございました。

	lilium		rosas		
		her			
rosmarino menta	salvia		sisimbria	fasiolo sata regia	
		bu			
	ruta		cumino		
		la			
	gladiola		lubestico		
		ri			
	pulegium		feniculum		
	us				
	fena graeca		costo		

Abb. 590
Kräutergarten aus dem St. Gallischen Kloster-
baubiß aus dem Jahre 820.



A. Tchirch:Handbuch der
Pharmakognosie(1933)より引用

向かって左、川瀬先生、右、滝戸先生(司会者撮影)